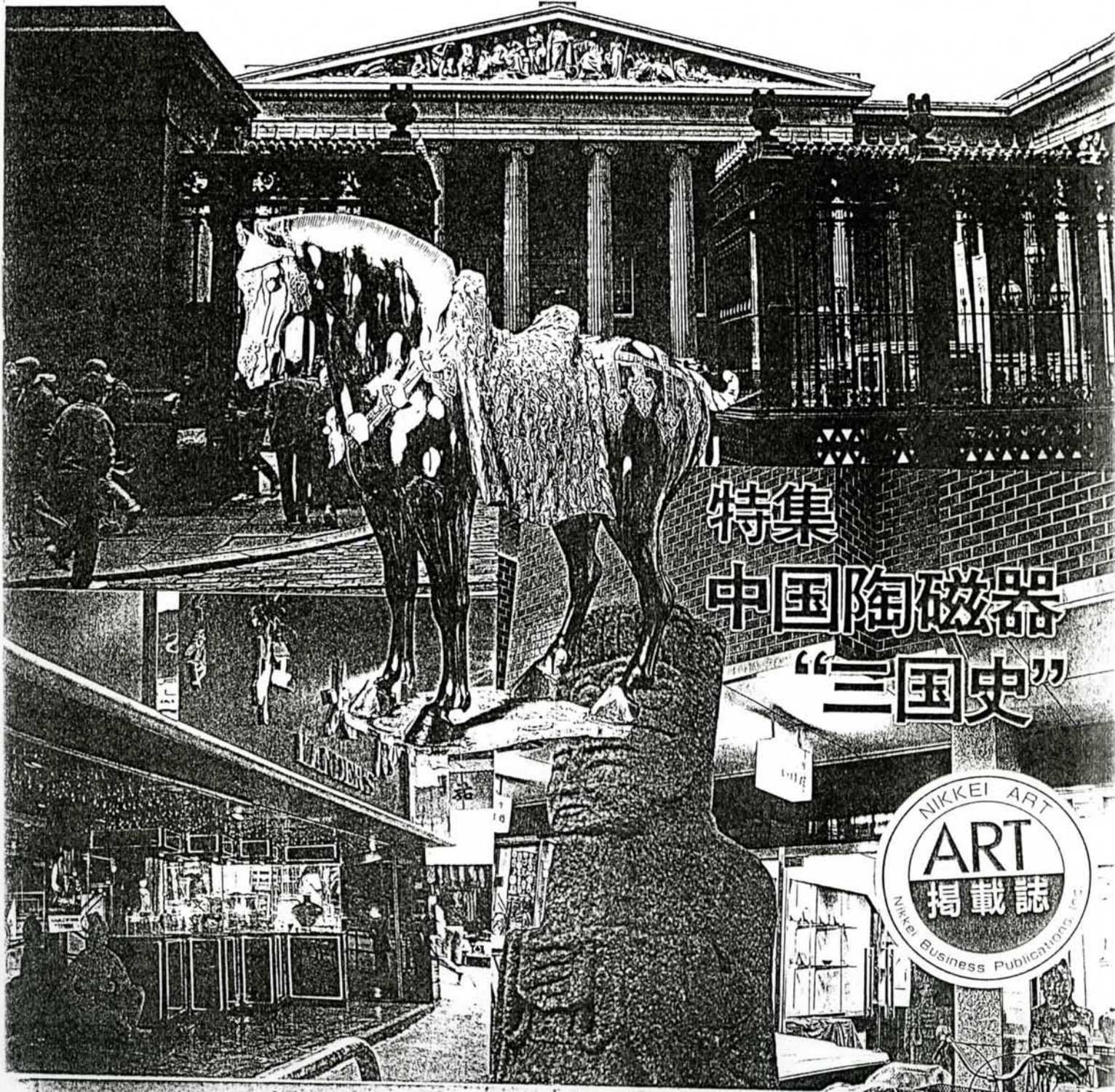


にっさいアート

1990/3
NIKKEI ART



特集
中国陶磁器
“三国史”



で、自らの感性を守りながら制作してきた数少ない画家のひとりと認め、期待しているために楽しくもない苦言を呈しているのである。

日本画の素材は長い伝統と経験から今日まで引き続いて使われてきたものである。そこには深い知恵が働いている。日本の自然を描くのは適当かもしれないが、中国の自然を描くことは別の次元で考えなければならない。

村松の黄山は今後の課題としてこ

れくらいにしておく。しかし同時に展覧された魚に彼らしさが表れていたので紹介する。「鱈や秋刀魚」「群れに入る」「白波飛魚」「水中での出来事」はいずれも波の線描に新奇さがあり、今回の新作中成功した例である。魚のフォルムも程良く抑制がきき、波の線描と緊張を保ち、日本画挿絵症候群の感染から立ち直りの可能性を感じた。

(1/22~2/3 ギャラリー毎日神保町店)

桐谷純子展

開かれたものと閉じられたものの相剋

土の素材としての特徴は、しなやかな柔かさともいえる。桐谷の新作展はこの土の特徴を一回転させて強調しようとした試みである。

土は人間の手になじみ易く、生き生きと反発し、同時に変幻自在な形となって応答する。それは一見素直な造形を可能にさせるが、確固とした存在を主張することも忘れない、大変したたかな素材なのである。

自在な形という点では、溶けた銅や鉄のような金属ほど融通無碍ではないが、土の形はそれだけ人間の意志と見事に同調する資質をもっている。

人間の意志が即物的に通じ合う対象というものが世の中に数多くあるはずはなく、土と人間はその意味では未だに蜜月状態を続けているのである。

土は人間の手になじみ、形作られるものでありながら、同時に眺められるものでもある。桐谷の作品はこの眺める対象として、土に本来付与されたさまざまな要素を生の状態にまで剥ぎ取ったのである。あとに残った生の要素は、無機質の性質を保ちながら奇妙な有機体を感じさせる。それは桐谷というひとりの人間の観念を純粹培養するための容器を空想させる。確かに褶曲という造形における運動のベクトルはプラスとマイナスの緊張関係にあるが、決して固定的に張りつめたものではない。視覚の端にある形は光と影によってさまざまな変貌をとげるが、一刻も変わらず不動の状態を保持し続けるのである。人間の観念がそれにあたる。

桐谷の作品は明らかにコンセプチ



TAHITI 素描 45×30cm

5 香月泰男展

3・8—3・20

3 古賀文子個展

3・26—3・31

フランス版画展

3・12—3・21

UKB 美術サロン
(宇部全日空ホテル内)

宇部興産ビル(株)主催

5 丁目ギャラリー

〒104 東京都中央区銀座5-7-10
ニューメルサ 7F ☎571-5061

6 丁目ギャラリー

〒104 東京都中央区銀座3-3-6
銀座モリタビル 2F ☎564-1606

FORMES GALLERY
フォルム画廊

ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE

FRAME

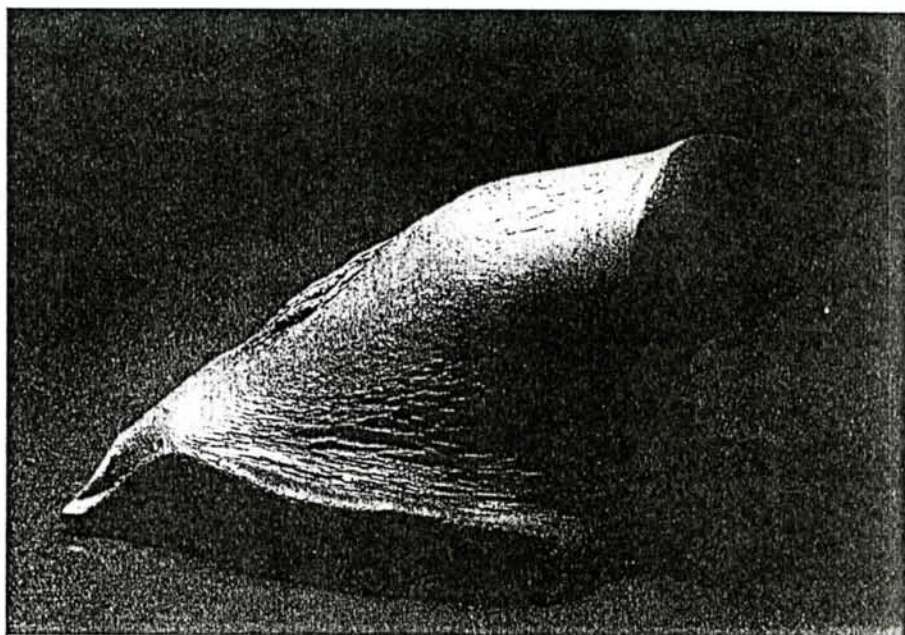
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA
BEST ONE
ART・CORE・MAEDA
ART・CORE・MAEDA

THE BEST FRAME
FOR
THE BEST PICTURE



ART・CORE・MAEDA
TEL.0492(59)1195
FAX.0492(59)1198

〈資料請求番号202〉



「褶曲」

ュアル・アートの文脈の中で論じられるべきものだ。ここで論じられる内容はものと観念を別々に引き裂くことではない。あえていえばものと観念の曖昧な関係を清算し、それぞれのあるべき状態を露わにすることである。その作業過程の後に、初めてものが人間に語りかける声が聞こえてくる。

一方で桐谷の作品は、あらゆる観念を閉じ込めてしまう器としてある。つまり自在な造形は静止の状態をできるだけ壊そうとする。そこに殻を打ち破ろうとする内側からの圧力を準備する。それが造形表現のひとつの形として表れる。作用と反作用の絶妙な関係がここに成立する。

コンセプチュアル・アートに造形の手順を問うことの意味はない。造形された形のままであり続けることに意味があるのだ。桐谷の作品の場

合でいえば、ある均一の厚さをもった土の板を任意に折り曲げることによって、土の素材の特質を抽出し、視覚の錯覚を生み出し、同時に褶曲した状態の土の間に特別の関係が生まれるわけではない。あくまでも両者は無関係であり、それぞれが互いに影響されず自立した状態を保ち得るものとしてある。ここには秘密の暗号もなければ、暗黙の了解事項もない。土は土としてあり、褶曲の状態がいつまでも静止したまま存在する。これが観念的にみれば開かれたものか、閉じられたものであるか、それ自体とりあえず重要ではない。ものも観念も在るがままに在ることを確認すればそれはそれでいいので、桐谷の作品から何かを解読すべき努力は空しい作業なのである。

(1/8~1/20 八重洲ブックセンター)